

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 51 号

発行日

2025.05. 15

編集・発行

井上講四／堂本彰夫

※連絡先

〒901-2225

沖縄県宜野湾市

大謝名 3-13-24

教育協働研究所

～岳陽舎～

(井上講四宅)

Tel:098-963-9282

E-mail:

gakuyou17@outlook.jp

○これだ！これなのだ！こんな出会いが必要なのだ！

最近、テレビ番組からの題材が多くなっているが、ここでもまた、そうやってしまいうるものである！「家ついて行ってイイですか」という番組であるが（テレ東2025年1月1日放送／沖縄のテレビ局が番組を買い、このほど放映していたらしい。場の設定自体が、私にはかなり微妙で、あまり見てはいないのであるが）、私の奥さんが、先日、昼食中何気なく、その放送のことを知らせてくれたわけである！徐々に涙声になり、私に、その興奮を伝えてくれたのであるが、よほど感極まるものが、そこにはあったのであろう？

そこで、それが気になって、ユーチューブで再視聴したのであるが、やはり何とも言えない感動？が、そこにはあった！北海道の退職間際の中学校長の、怪しげな夜の姿がまづはあったが（PTAの二次会？）、そこで知らされた彼の教員人生が、本当に胸を衝くものであったわけである！教員を目指したきっかけ、「自らの経験を活かし、生徒たちにつたえたい」という思いが、彼のここまでするまでをつくってきたという！それが、学生時代に起こした遭難事件（大学卒業記念の、無謀な流水を伝った知床半島一周の、友人3人での旅）である！

その時救助してくれた海上保安庁の職員の話（自らの仕事の意味）が心に刺さり、意を決して教職の道を選んだとのこと（他の一人は医者、もう一人は青森の高校で教師）！退職後は、確かスリランカの日本人学校へ赴任。生涯現役。「うざいけど、好き！」（父母や生徒達の評判何と現代風な言い方？）。さぞかし、名物（さつくばらんな？）校長であったことであろう。しかし、これからは、こうした名物校長（教師）も、徐々に姿を消していく？一抹の寂しさを覚える私でもあるぞ！

○似非せヒーローは、いつかは自壊する？

もう大分、その話題自体は遠のいてしまったが、一応用意していたので、ここでのクリだけはつけておきたい！ただし、こういうことは、本当は書きたくないし（書いても虚しき方が先に立つ）、そもそも似たような論評は、それこそ数限りなくあるように思う？当人達には申し訳ないが（ある意味時代の為せる業でもあるので）、それが宿命と言えは、そうなのである！ただ、同じ苦勞（努力？）をしても、そうならない人達もいるわけであり（むしろ、そちらの方が断然多い？）、結局は、その人の「人間力（性）」の問題ということにもなる！！

そこで改めて、このことは、芸能人というか、いわゆるタレントと呼ばれる人達のことだということとは容易に分かることであるが、実は、こういうことは、他の世界にも、往々にしてあるということである（華やかかどうかは別にして）強いて言えば、政治の世界も！すべてが虚飾と言えは、言い過ぎであろうが、調子に乗ったり、周りの「よいしょ」に踊らされることは、ある意味人間らしさの裏返しとも言える？地位や名誉、そして力ネが、そこに介在しているとも言えるが、何ともやるせないものである！ましてや、「推し」の人にとつては…

ちなみに、世の無常や儚さを哀れた昔の文人達は、同じように、こうした光景を、嫌というほど見ていたのかもしれない？どちらが幸せであるかどうかは、人それぞれであろうが、少なくとも「似非」は、それ故に、いつかは自壊するということである！ただし、真のヒーローは、絶対にいる！それもまた、真実である！！

○理念はあるのに、何故に成就せぬ？それが限界性なのか？

これまた最近、残念ながら？、よく「国」というものについて考えさせられる！ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナの戦争、あるいは現下のアメリカの関税戦争？を、嫌と言うほど見せつけられているからであるが（もちろん、これだけではないが）、そこにあるのは、やはり「国」というものの存在意義である！何をいまさら？と言われるかもしれないが、今、改めて、我々人類が直面しているのは、まさにそのことだと思えるからである！つまり、何のために、「国」があるのかということである！とは言え、これに関わっては、様々な考え方があろう！そして、それを踏まえて、これまで幾多の先人達が、その意義やあり方を論じてもきた！それでもなお、今またそれが問われるのである！！しかるに、私は、稚拙であると言われるかもしれないが、そのことを、一人の人間の誕生というところから、考えてみたいのである！ただし、これは、「空理空論」ではない（そう信じてい！）！要は、揺るぎない真実として、我々人間は、ある時、ある場所における一組の男女（親）の出会いから（こう表現しておこう！）、その「生」を受ける！問題は、その「生」が、どのような形で成就するのかである！言い換えれば、彼／彼女の幸せ（命・財・仲間）が、どのように構築されるのかということである！

だが、それを大きく左右するのが、その人間が属している「その国」の状況であることは言うまでもない！翻って、我々人類社会は、その人間の幸せを獲得・維持するための理念（装置と言いたいところだが、それには至っていない？）として、現在、「自由」「平等」「博愛」というものを見出している（この思想価値は、ある意味普遍である！）！とは言え、これらは、考えてみると、互いに矛盾するものを孕んでいる？詳述はできないが、「自由」と「平等」は、現実的には対立するものとなる！だから、「博愛」というものも、常にその対立と向き合わなければならない！

ということとは、それらの、言わば「大矛盾（葛藤）」を克服していくことが必要となる！！そこが、「知恵の出どころ」ということになるが、それを弁えた国際社会がなければ、現実には厳しい？だが、それが、人類の限界（性）なのかもしれない？（井上）

○細胞！脅威のメカニズム？生命の神秘！

人間は凄い！この一言である！細胞 キネシン？しかも、他の動植物も凄い！これもまた、細胞から出来ている！だが、その研究成果を、我々はテレビを通じて知ることが出来る！これは、NHK番組「人体Ⅲ 第1集 命の源」細胞内ワンダーランド」(初回放送日：2025年4月27日)を見ての、偽らざる感想である！

例によって、番組案内には、「タモリ×山中伸弥W司会でお届けする『人体』最新シリーズの第1集。人体およそ40兆個の細胞の中には不思議な世界が広がっていた。単なる物質のほずなのに、歩き、合体し、協力し合う“細胞の内キヤクター”たち。命のない部品が集まって、命を営む。フアンタジックな世界を最新顕微鏡と超高精細CGで映像化。私たちの命を突き動かす源を探っていく。ゲストのMISIAさん、澤穂希さんとのトークも交え、わかりやすく伝える。」とあった。

具体的には、「キネシンは、真核生物の細胞質中に存在するモータータンパク質の一種で、細胞内物質輸送に重要な役割：このタンパク質は、ATPをエネルギー源として利用し、微小管と呼ばれる細胞骨格の構成要素に沿って動くことで、細胞内のさまざまな物質を運搬：キネシンはATP依存型の生物学的モータータンパク質で、微小管に沿って分子を運搬することで細胞機能を支え：細胞分裂や細胞内での小胞や細胞小器官の移動に不可欠な役割：このタンパク質は主に細胞の中心から周辺へと、微小管のプラス端へと荷物を前向きに運び：一方で、ダイニンという別の微小管依存性モータータンパク質は、マイナス端に向かって荷物を運搬：キネシンとは異なる動き：」とも。

知らない名前の連続で、頭がこんがりもしたが、我々も含めた「生物」の凄さは、それこそ言いようがない！だが、我欲で、こうした生物の存在を踏みにじる輩がいる！困ったものである！再度言う！細胞は凄い！だが、それを発見した人も凄い！その凄さを無くしてはいけない！

○相変わらず「?!」に拘る、その真意は？

以前に書いたようにも思うが、私(達)が、何故、大いに不興を買っている「?!」の表記を多用するかであるが、ここでもう一度、その真意を披歴しようと思う！もちろん「?!」と「!」のどちらかの表記で表せば、読む側とすれば、理解がスムーズに行われるとは思っているのであるが、私(達)とすれば、その表記によつて、自らの思いを伝えたい、否、自らに言い聞かせたいということなのである！

書くという行為は、もちろん第一義的には、それを読んでもらう人の存在を前提としているわけだが、実は私(達)のそれは、そうではないということでもある！極端に言えば「事実」途中からそのようにしてきた！もちろん、自責の場合のみであるが！。ただし、余計なことではあるが、自然科学でのそれは、絶対に許されない！何故なら、そんなあやふやな主張は、意味がないからである(ある意味研究者失格である？！)ちなみに、英語に、「付加疑問文」というものがあるが、まさしくそれだとも言えるかもしれない！！

＜短歌に託して晴れても、五月晴れとは言い難く＞
・こんな先生もいるのだ！ 否、いたのだ？
その再来には 何が必要？

・似非ヒーローは、いつかは自壊する？

だがその似非は 周囲が作る？

・「自由」「平等」「博愛」！

見つけてはいるが 「相互矛盾」でもある!!

・人間は凄い！ というより生命は！

だがそれを踏みにじる 輩もいる！

・「?!」は 真実を告げるというよりは

一緒にそう思いませんか ということ！

＜特別コーナー＞堂本彰夫の古代史旅枕51＞

○ここからは、九州での隠れた実績を追つてその6ー

だが、もちろん、⑤の最後に述べたことは、私のまったくのオリジナルではない(先の藤井一郎氏等の所論からである！)とにかく、これまで把握してきた結果を推察すると、やはりその方がすんなりと理解が進むし、その後の「倭国の二極体制」構造の淵源が分かるということでもある！例えば、「記紀」によれば、紀元前60年に、南九州(日向?)から、宇佐・岡(豊後)・安芸・吉備を経て、その後(豊後)・河内、そして熊野から大和(橿原)に進出した神武(二行)であるが、その物語は、時代考証や、事実それ自体の信憑性等、多くの問題点を抱えているが、ある大きな事実(倭国大乱)諸部族・氏族の衝突・広域移動?を基にした、我が国建国譚の創出であったのではないかとということである!!

要は、何回も言うように、最終的には、百濟王族(沸流系余氏)・温祚系余氏(仇台系余氏)系彼らは、母系的には「倭人」とされる。の渡来・定着、そして、彼らの、(邪馬台国連合以降の)倭国(日本国)参入で、それ以前の倭人国家(半島南部を占んだ九州倭国)の実情(倭国大乱、邪馬台国の出現・没落?)↓倭の五王の出現(その後の二朝?並立)が、上記のことを踏まえると、さらに矛盾なく捉えられるということ、そして、件の邪馬台国の、その後の消息がはつきりしないということも、これによつて打開されるのではないかとということである!!

ただし、ここで留意しておきたいのは、例の卑弥呼の死後、男王が立つたが、国中が服さず、内乱?となり、再び、卑弥呼の宗女である台与(13歳)が共立され、内乱?は収まったということであるが、「宗女」とは縁戚関係であるので(姪?)、多分その争いは、卑弥呼の縁戚間の、言わば内輪争いであつた?!つまり、最初に男王(男弟?)が立つたのであるから、それは、邪馬台国内部の後継勢力であり、それに異を唱えたのが、卑弥呼の、別の縁戚勢力であつた、最初は、おそらく邪馬台国内部にはいないでどこからか移動してきて、その政策に干渉した勢力と考えられないか?それが、他ならぬ「阿蘇」からきた「饒磐龍命」勢力(多氏)であつたならば、その蓋然性は、さらに高くなるということである!!(つづく) (堂本)

＜編集後記＞ 5月も、早半ば！沖縄は、やがて梅雨となる?そんなことを想いながらの今号である！だが、数日前に、驚愕の経験?をした！是非、次号で採り上げたい！ (井上/堂本)